

都難言協会報

東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会

これからの知能検査

WISC-V

明星大学発達支援研究センター 小笠原哲史



子どもへの指導や合理的配慮を考える際に、「どのように」行うのかは個性が高く、最も悩む点でしょう。その点に大きなヒントを与えてくれるツールの一つがWISCです。子どもが「なぜ」つまずいているのか、その背景を理解した上で行う支援はより効果的に、そして子どもに安心を与えることでしょう。

2022年2月にWISC-Vが刊行されました。本年8月に開催された都難言協の専門研究会では本学の小貫悟先生と共にWISC-Vの話を見せていただきました。その内容も踏まえ、WISC-Vを活用する上で大事な点について改めて紹介したいと思います。

WISC-Vは、周りと比べて「遅れがあるか」だけでなく、自分の中にどのような「偏りがあるか」を

知ることができます。子どものつま

ずきの背景には「遅れ」や「偏り」が影響していることが多く、支援の方向性を見出す大事なヒントになります。「なぜ」つまずいているかわかると、「どうしたらいいか」のヒントが得られます。苦手から「なぜ」を推測し、得意から「どうしたらいいか」を考えていきます。指導や合理的配慮のアイデアといった具体的な手立て以外にも、「頑張っているけど上手くできない」本人の思いを理解することも重要です。例えば、書くことが苦手な子どもに対しては、書くことを向上する指導的発想や、書く以外の方法で記録をしたり、表現したりする合理的配慮をWISC-Vの結果から考えると、「頑張っているのに上手く書けない」本人の思いや不快感を理解することで、子ど

もは安心して先生の前で活動に臨むことができるでしょう。さて、WISC-Vは主要指標が5つ(言語理解・視空間・流動性推理・ワーキングメモリー・処理速度)が増えました。IVの知覚推理がVでは視空間と流動性推理の2つの指標に分けられました。どちらも視覚刺激を元に行っていますが、形を正確に捉えたり、操作したりする力と、法則性を見出したり、その法則性を使って問題解決したりする力の得意苦手が区別して示されるようになりました。前者は漢字や図形問題、後者は基本問題から応用問題へのステップでつまずく子どもにとって重要な情報を提供してくれるでしょう。

- ◆ 主な内容 ◆
- 一面 これからの知能検査 WISC-V
 - 二面 専門研究会
 - 三面 全難言協埼玉大会
 - 四面 学級紹介 ブロック研究発表会 他

もは安心して先生の前で活動に臨むことができるでしょう。

さて、WISC-Vは主要指標が5つ(言語理解・視空間・流動性推理・ワーキングメモリー・処理速度)が増えました。IVの知覚推理がVでは視空間と流動性推理の2つの指標に分けられました。どちらも視覚刺激を元に行っていますが、形を正確に捉えたり、操作したりする力と、法則性を見出したり、その法則性を使って問題解決したりする力の得意苦手が区別して示されるようになりました。前者は漢字や図形問題、後者は基本問題から応用問題へのステップでつまずく子どもにとって重要な情報を提供してくれるでしょう。

また、5つの補助指標(GAI、CPI、非言語能力、聴覚ワーキングメモリー、量的推理)が加わり、言葉に課題のある子ども、算数が苦手な子ども、ワーキングメモリーに苦しさがある子どもなどのつまずきを検討することも可能になりました。

このように新しい指標も加わり、より多面的に子どもの認知特性を

理解し、効果的な支援につながっていくことが期待されるWISC-Vですが、もちろんWISC-Vだけを行えばいいというものではありません。授業中の様子、ノートやテスト等の成果物、直接指導する中での子どもの反応など、日頃の行動観察において「どこに」つまずいているのかを見立て、「なぜ」つまずいているのか「どうしたらいいか」をWISC-Vの結果とすり合わせていくことで初めて検査結果が子どもの実態と結びつき、具体的に効果的な支援につながっていくことでしょう。

きこえとことばの教室の先生が子どもと関わる中で生まれる専門性に裏付けられた見立てが学校内で共有され、専門機関の検査者に伝わり、その情報も踏まえてWISC-Vが実施されることで、より活きた報告書となって帰ってくることでしよう。その結果も踏まえて、より理解を深めていくことで、子どもが安心して前向きにチャレンジできる教室になっていくことを期待しています。

都難言協
ホームページは
こちらから



<https://www.tonangen.com/>

第9回 専門研究会

聴覚障害者を取り巻く現状と求められる合理的配慮

東京手話通訳等派遣センター 森せい子 先生



聴覚障害は難しい障害

聴覚に関する困難性を表す「聴覚障害」「聴力障害」「難聴」「聾」は、それぞれが厳密に定義され使い分けられてはいない。聴覚障害という障害は、時代や社会、親といった環境要因によって困難性が左右されるとある(聴覚障害学より)。

つまり、同じ聴力でも環境要因が障害の困難性に深くかわるといいうことでもある。

聴覚障害者の特性・多様性

語音明瞭度の評価も大切であり、小学校中学年くらいから一音節の文字の聞き分けテスト等を実施して聞き分けの力もみてあげる必要がある。聞き間違いが半分以上あると会話ができない。

補聴器：人工内耳で聞こえても、聴覚障害の無い人と同じようには聞こえないことを理解して挙げてほしい。難聴児はいつもあいまいな聞こえの中で不安を抱えていることが多い。周囲の対応次第では、口元を見て想像し、分かった振りをせざるを得ない状況がある。

聴覚障害児が完全に情報を受け取れるように聞こえだけに頼らず視覚的な働きかけ、手話なども積極的に取り入れてほしい。

聴覚障害者になって分かったこと

軽度・中度・重度難聴・失聴、全ての聴力レベルを経験し、軽い難聴の方が聞こえづらさからの不安感が大きく大変だった。聴覚障害は感覚器官の障害。かゆみ・痛みと同じく、尺度がない。一人ひとり違う聞こえ方について、自分の聞こえ方を説明できないのは当たり前で、自分のように聞こえた経験がある大人ならば何とか話せるが、児童は難しいということを理解してあげてほしい。

療育支援がやっと始まった

聴覚障害の子供は自分のつらさや困り感を言語化できないことが多いし、知識や情緒を育む経験値が低い場合も少なくない。他人の痛みを分かるような心が成長しているか、自分を大切にし、自分が大切にされているという幸福感をもち精神的に健康であるかを是非見て頂きたい。

ライフサイクルにおいて気を付けてもらいたい事

乳幼児期

赤ちゃんは泣くことでしか表現できない。耳や頭が痛いのかもしれないと考え、子なりのSOSの発見を遅らせないでほしい。

児童期・思春期

知能・体・社会性が育つ大事な時期。発達障害と聴覚障害の特徴は似ている。小学校低学年は発達障害に特化した支援・療育の必要性を見極める時期。この時期に理解し、適切な療育がないままだと、脳の異常な興奮が続いてしまうこともある。聴覚障害とプラスしてあげる必要がある。

ジェスチャーや身振りで人との関係を作れているか、アイコンタクトが大事。お母さんがニコっとした時ニコリ返しているか。安心して眠れ、安心して笑えることが家庭の中で必要要素。

思春期・青年期

中学生ぐらいになったら、聞こえづらい耳でたくましく生きていくために、先生たちには社会の橋渡しをして経験を積ませて頂きたい。

大人になったら親から離れて他人をインストールして友人を作るステージ。どんな人と仲良くなれるのが大切。小学校児童期・青年期で自分の障害をきちんと受容できていることが重要。

環境整備・合理的配慮

難聴のある子どもたちにとって先生は「僕の耳のことを分かってくれ、分かるお話をしてくれ、いつも笑ってくれ」と思える大切な理解者。

難聴・聴覚障害は皆さんが想像するよりも心理的に辛く孤独であることを知ってほしい。常に情報が入っていないのではないかと気にかけて、人とつながることを教育してあげてください。

文責：兼平 真澄

きこえとことばの教室 あの時、そして今

練馬区立旭丘小学校 長瀬 和美

きこえとことばの教室の担任としてスタートした頃、まだ教室の認知度も低く「通級制とは」から説明する必要がありました。

アナログ補聴器からデジタル補聴器、人工内耳へ、機器の発達には目を見張るものがあります。また、「障害者差別禁止法」「合理的配慮」など障害のある方たちを取り巻く環境も大きく変わってきました。

このような変化に後押しされるように、現在は、当事者から多くの声が発信されるようになりました。その声から私たちは、自分のことを理解し必要な支援や環境を求めることができる力の大切さを学びました。

個別指導を基本とするきこえとことばの教室では、個に応じた指導を追究してきました。これは、現在求められている「個別最適な学び」に繋がるものです。

「個を大切に指導」や「親子との深く長い繋がりが」、あの頃も今も変わらず、私たちが目指すきこえとことばの教室の姿ではないでしょうか。

全難言協 埼玉大会での発表を終えて

練馬区立南町小学校 ことばの教室 末永絢音

七月二十七日、二十八日の二日間、さいたま市のソニックシティにて全難言協と全情研の合同開催で埼玉大会が行われました。私は埼玉県深谷市の発達・情緒障害通級の先生と共に「言語発達・読み書きに関する指導・支援」の分科会で発表をさせていただきましたので、報告いたします。

発表のテーマは、「発達性読み書き障害が疑われる児童の支援」です。発達性読み書き障害が疑われる児童への支援を通して、大切だと感じた三つのこと①早期発見・早期支援②アセスメントに基づいた見立てと支援③家庭・在籍学級との連携についてお話しし、児童二名の事例を紹介しました。最後に今後の課題を挙げ、発表を終えました。午後の部は会場にいらっしゃる先生方と協議を行い、明治学院大学の海津亜希子先生から御指導をいただきました。

発表当日の朝までは、教員経験の浅い私が分科会の発表者をさせていただくことに対して、不安な気持ちがありました。一日を終える頃には、発表することで得られた学びの大きさに「本当にやってよかった。」という思いでいっぱいでした。

対面で参加してくださった様々な校種や地域の先生方、経験の豊かな先生方と学び合えたことは、大変貴重な経験となりました。意見を交換する中で、関係機関との連携や自己理解を促す支援、退級後も適切な配慮等を受けて学習していくために必要なことなど、私が今後の課題と感じていたことについて考えを深めることができ、二学期からの支援に活かすことができていると思います。当日いただいた意見や感想の記録は、読み返して日々のエネルギーにしています。令和七年度の東京大会でも、充実した学び合いができることを心待ちにしています。

吃音についてどう思う？

ある小学校のきこえとことばの教室で、吃音のある子たちに聞いてみました。一部をご紹介します。

Q1「吃音についてどう思いますか？」

- なんてうまく声が出ないんだろうと思ったり、まあいいやって思ったりする。
- ふだんは気にしないけど、真似された時に気になる。
- 日常生活の身近なもの。なぜなら、しゃべる時に出て、しゃべることは生活の一部だから。
- ポケモンの特性みたいなもの。ぼくは生まれつき「くりかえし」という特性をもっている。

Q2「吃音で困ったこと、嫌だったことはありますか？その時にどうしましたか？」

- 学校の音読で言葉がつまって困った。⇒全員黙読の形にしてほしいと先生に相談した。
- 朝の健康観察で「はい」と言えなくて困った。⇒先生と相談して言えない時は手をあげることにした。
- 宿題の音読で言葉が出なくてすごく嫌だった。⇒先生と相談して、家族と一緒に読む形にした。
- 発表の時につまって何も発表できなくて困った。⇒近くの友達に助けてもらって何とか発表できた。
- 授業中、グループで話し合う時に「どうしてつまるの？」と聞かれて嫌だった。

⇒「黙って待っていてほしい。」と言いたいけど、まだ言えていない。

文責：伊勢 紗希子



吃音は症状そのものによる困難もありますが、周りの環境や反応の影響がとても大きいです。同じ吃音であっても、その捉え方やどのように対応してほしいかは、人それぞれです。

①「ゆっくり」「落ち着いて」の声かけをするのではなく、ゆったりと話を聞く。

吃音が出て大丈夫と思える環境だと話しやすくなり

ます。

②どんな対応をしてほしいか、その子と相談する。

まずは「困っていることない？」「いつでも相談してね」と声をかけていただけると嬉しいですよ。

その子らしく生き生きと過ごすために、周りの人の吃音に対する理解がとても大切です。何かありましたら、各区市町村にあることばの教室にお気軽にご相談ください。

◇ 学級紹介 ◇

日野市立南平小学校 せせらぎ

本校の難聴・言語障害通級指導学級「せせらぎ」は、令和2年4月にお隣の豊田小学校から移設して4年目となりました。京王線の線路沿いに位置している学校のため、移設に伴い聴力検査を行う防音室を含めた全学習室に防音対策をしました。

11月末現在、児童数は難聴4名、言語障害74名で、移設当初より30名増加しています。言語障害の内訳は、構音20名、吃音19名、言語発達33名、緘黙2名で、難聴と吃音を主訴とする児童でグループ学習をそれぞれ実施しています。

吃音を主訴とする児童は人数が多いため、グループ学習は、全員・低学年のみ・高学年のみ、と内容によって参加人数を分けて年10回実施しています。休止していた調理実習も今年度から再開し、1学期末にはアイスにフルーツなどをトッピングしたパフェを作りました。食べ物を介すと自然と会話が弾み、「友達ができた!」と喜んで帰る児童もいました。今後も児童同士の交流を豊かにし、吃音のことを話しやすい関係づくりを心掛けていきたいと思っています。



◆ブロック研究発表会について◆

江東ブロック

テーマ

児童の言語力の向上を図る指導の工夫

読み書き分科会

「児童に応じた

漢字習得を図る指導の工夫

多様な学習ルートの活用を通して

聞く・話す分科会

「会話を通して

児童の言語力の向上を図る指導

教師側の視点をもった関わりを通して

講師 東京学芸大学 名誉教授

大伴 潔 先生

日時 令和六年二月二十日(火)

午後二時から四時半まで

実施方法 Zoomによるオンライン開催

多摩東ブロック

テーマ

「読み書きの苦しさのある児童の

見立てと指導について

講師 横浜国立大学 准教授

後藤 隆章 先生

日時 令和六年二月十三日(火)

午後二時から四時半まで

実施方法 Zoomによるオンライン開催



事務局より

今年度の事務局では、5月に感染症法上の取り扱いが5類に移行され、情勢の変化が著しい中で、これまでの各研究会の実績を考慮しつつ、他団体とも連携し、都難言協の活動を推進しております。

都難言協は、各区市の分担金や東京都教職員研修センターの研究奨励費、会員の方々の協力によって支えられています。研究において専門性・汎用性を高めることにより、「通級指導学級」制度の維持・発展を目指しております。来年度も御協力をよろしくお願いいたします。

―編集後記―

今年度は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行するなど、コロナ禍の状況にも変化が訪れた年でした。都難言協の活動も、コロナ禍以前に戻ることや、新しい形式を模索することなど、今後も様々な状況の変化があるかと思えます。

会報作成に御協力頂きました皆様により感謝申し上げます。本会報を通し、難言教育に関わる皆様との情報共有や、関係者の皆様からの難言教育に対する一層の御理解を賜る機会となりましたら幸いです。

都難言協会報

代表者 (会 長) 本橋 忠旗

責任者 (広報委員長) 浅野 努

発行日 令和六年一月四日

発行数 六一〇〇部

印刷 有限会社 正陽印刷